

I. 普及・研究活動（2006年度）

1. 過去の普及活動

埋蔵文化財調査室は1981年（昭和56）に設置されて以降、継続的な発掘調査と調査概要を報告するための『統合移転埋蔵文化財発掘調査年報』刊行に伴う基礎的な出土遺物の整理によって展示可能な資料が次第に蓄積されて行ったが、調査室の組織や調査室のスペースなどの関係で、出土遺物のごく一部を調査室の一角に展示するのみに留まり、基本的には広く一般に出土資料の公開を行っている状況ではなかった。したがって、1990年代前半までの主要な調査室の普及活動は、発掘調査に伴う現地説明会を中心としていたと言える。

調査室は、設置以来、事務局分室などの他部署と同一フロアを共有しながら、移転計画の進行とともに所在を転々としたが、1995年（平成7）4月に現在の特高受変電所（鏡山1丁目1-1）1階に移転し、現在に至っている。当初、広島大学後援会事務局と1階フロアを共有していたが、1996年（平成8）4月から単独の占有となり、新たに利用可能となった約20㎡を利用して仮展示室とした。また、1996年度に申請した教育研究学内特別経費プロジェクト「東広島キャンパス内遺跡・遺物の保存と活用策の研究」が採択され、仮展示室を大幅に改修して1997年（平成9）3月に埋蔵文化財調査室展示室として一般に公開した。また、同経費を利用して1997年4月には東広島キャンパスの遺跡の紹介を中心とするホーム・ページを開設した。

その後、2002年（平成14）4月から3年間、広島大学が文部科学省の地域貢献特別事業に採択され、その事業内容の一つである高度生涯学習支援システム：コミュニティ・パートナーシップ構築事業に参画した。調査室が行った具体的な事業は、東広島キャンパスの調査によって出土した遺構・遺物の画像データ・ベースの構築とホーム・ページによる一般公開であり、これに伴って、従来のホーム・ページを基本的に再構築した。調査遺跡の概要について大幅に内容を追加するとともに、出土遺物の紹介を新たに加えた。また、埋蔵文化財豆辞典、広島県内の主要遺跡紹介、調査室の調査・普及活動などの頁を新たに加えた。画像データ・ベースや広島県内の主要遺跡紹介などの頁は現在も構築中であるが、2006年度（平成18）からは広島県内の埋蔵文化財関連の行事紹介の頁を加え、随時更新中である。

東広島キャンパス内には、試掘調査や発掘調査の成果に基づいて、保存区として現在16ヶ所が残されている。これらの整備についても予算の許す範囲で整備し、公開してきた。1982年度（昭和57）には農場地区の鏡西谷遺跡D・E・F・G地区が現状保存されることが決定されたことに伴い、表土流出防止のための砂防用ネット設置・種子吹付けを行い、1985・86年度（昭和60・61）に散策道の整備、説明板の設置などの整備を行った。また、1983年度（昭和58）に隣接地に所在する鏡東谷古墳の鏡西谷遺跡D地区への移設を行い、一般に公開した。1990年度（平成2）にはアカデミック地区南部の留学生宿舎に所在する西ガガラ遺跡第1地点旧石器時代住居跡周辺の現状保存に伴い、遺構埋め戻しと種子吹きつけなどの保存整備を行った。1994年度（平成6）にはアカデミック地区西部に所在する鴻の巣南遺跡の弥生時代竪穴住居跡の現状保存に伴い、遺構の埋め戻し、芝貼り、遺構表示などの保存整備を行った。2001年度（平成13）にはアカデミック地区の東に隣接する山中池南遺跡第2地点の現状保存に伴い、遺構の埋め戻し、須恵器焼成窯跡の補強工事、種子の吹付け、各遺構の説明板設置などの保存整備を行った。2002年度（平成14）にはアカデミック地区北西部の鴻の巣遺跡弥生時代竪穴住居跡の現状保存に伴って、遺構の埋め戻し、種子吹付け、説明板の設置を行った。また、見学可能な遺跡を中心に、2000・2001年度（平成12・13）に、説明板を設置した。遺跡名を列挙すると、西ガガラ遺跡第1地点、同第2地点、新池遺跡、鴻の巣遺跡、鴻の巣南遺跡、陣ヶ平西遺跡、山中池南遺跡第1地点、同第2地点、同第4地点の9遺跡である。なお、鏡西谷遺跡、西ガガラ遺跡、山中南遺跡第2地点については年度末に草刈を行っている（1998年度（平成10）からは業者委託）。アカデミック地区内の遺跡については、2000年度から植栽管理等が業者委託となり、遺跡保存区の草刈についても合わせて実施されている。

この他、単発的な普及活動として、文学部移転記念展示会（1995年（平成7）10月）、学部間ウォークラリー（1999年（平成11）10月）、第51回大学祭（2002年（平成14）10月）などへの参加がある。文学部移転記念展示会では、文学部会議室において農場地区の鏡西谷遺跡やガガラ地区の西ガガラ遺跡出土資料を中心に展示した。学部間ウォークラリーでは、文学部会議室においてガガラ地区の西ガガラ遺跡、アカデミック地区の鴻の巣遺跡を中心とする旧石器時代の出土遺物を中心に展示した。大学祭では、事務局会議室において東広島キャンパス出土の主要遺物を時代順に展示するとともに、講演会、遺跡見学会を実施した。また、調査室教官の講演などの普及活動が多数あるが、すでに『広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報』などで公表してい

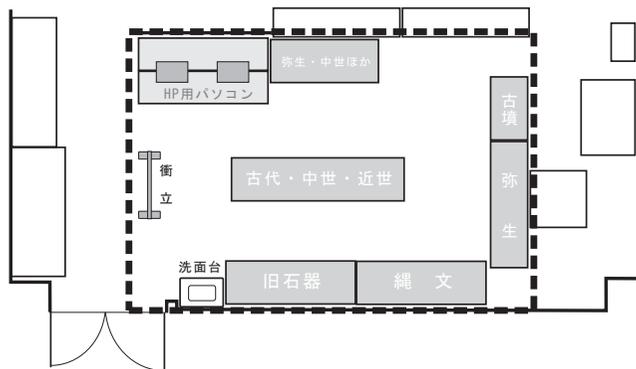
るので、ここでは割愛する。

2. 2006 年度（平成 18）普及活動の概要

本年度の主要な普及活動は、展示室の公開である。すでに述べたように、展示室の面積は約 20㎡で、東広島キャンパス所在の 28 遺跡から出土した遺物を旧石器、縄文、弥生、古墳、歴史の 5 つの時代に区分し、ローケース 3、ハイケース 3 を使用して時代順に展示している（第 28 図）。展示総点数は 452 点で、内訳は旧石器時代 110 点、縄文時代 150 点、弥生時代 80 点、古墳時代 30 点、歴史時代 82 点である。旧石器・縄文時代および各時代混合のローケース背面の壁を利用して関連の遺構写真を展示する、簡単な展示室である。本年度は、学内の授業関連の見学者を中心に約 200 名の見学者が来場した。

ところで、2006 年（平成 18）10 月に広島大学総合博物館が設立された。広島大学に博物館を設置する構想は 10 年以上前からあったが、2004 年（平成 16）4 月に総合博物館設立準備会議が設置され、総合博物館設置への動きが本格化した。同会議の 1 年間の議論を経て、2005 年（平成 17）4 月には総合博物館設立準備室が設置され、総合博物館開館のための準備が開始された。総合博物館の設置にあたり、総合博物館設立準備会議において、広島大学の所有する膨大な学術資料の公開が検討され、広島大学東広島キャンパスの自然環境を含めたキャンパス全体を博物館展示の資料として位置づけることが方針として確認されていた。その具体的な形として、各学部、センターなどが所有する公開可能な資料を展示するスペースをサテライト館として位置づけ、その開館に当たって

は総合博物館が予算的な援助を行い、開館後も総合博物館と協力しながら運営に当たる構想であった。博物館開館の初年度は埋蔵文化財調査室と生物科学研究科がサテライト館として候補に挙げられ、博物館準備室と両者間で調整が図られた結



第 28 図 埋蔵文化財調査室展示室展示ケース配置図
(破線枠は展示室の範囲を示す)

果、2006年度中に開設するという事で合意に達した。

これを受けて埋蔵文化財調査室は、既存の展示室を改装し、改めて一般に公開することとし、2005年9月には、埋蔵文化財調査室展示企画ワーキンググループを設置した。ワーキンググループは、以下の4名で構成した。

グループ長 藤野次史（広島大学埋蔵文化財調査室）
委員 河瀬正利（広島大学文学部名誉教授）
三浦正幸（広島大学大学院文学研究科教授）
榎林啓介（広島大学埋蔵文化財調査室）

ワーキンググループでは、調査室展示室の展示内容や展示方法などについて、埋蔵文化財調査室の藤野、榎林が素案を提示し、全員で検討する形をとった。2005年9月～2006年8月まで約1年間にわたって7回の会合を持ち、展示内容、配置などの最終案を作成した。この案をもとに総合博物館と調整を行い、業者選定を行った後、展示資材他の変更などの微調整を行った。サテライト整備費380万円のうち、約191万円を埋蔵文化財展示室改修費として充当し、改修費用の大半を賄うこととなった。当初、埋蔵文化財展示室サテライトは2006年度末に開館する予定であったが、総合博物館の開館が遅れたこともあり、翌年度（2007年度）のできるだけ早い段階に行うこととし、展示室の改修は2006年度中に行うこととなり、2007年3月末に無事終了した（展示の準備には約1ヶ月半を要し、2007年5月19日に開館した）。

3. 2006年度（平成18）教育・研究活動の概要

埋蔵文化財調査室の教育・研究活動として、2007年3月に東広島キャンパス移転に伴う発掘調査のうち、アカデミック西部地区の4遺跡（鴻の巣遺跡、鴻の巣南遺跡、ぶどう池南遺跡第1地点、同第2地点）について発掘調査報告書を刊行した（『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』）。

また、埋蔵文化財調査室構成員の教育・研究活動については以下の通りである（普及活動を含む）。

1) 教育

藤野次史 「総合科目 キャンパスの自然環境と環境管理」（前期、総合科学部開講）、
2回分を分担（「東広島キャンパスの埋蔵文化財」）
藤野次史 「博物館概論」（前期、文学部開講）

2) 講演・研究発表

藤野次史 「中国山地の旧石器文化」東城町博物展示施設「時悠館」2006年度春の企画展記念講演（広島県庄原市、時悠館）

藤野次史 「東広島市鴻の巣遺跡・ぶどう池南遺跡第2地点の剥片剥離技術」第23回中・四国旧石器文化談話（広島県庄原市、庄原市民会館）

榎林啓介「宋墓の基礎的研究－墓の構造からみた現状と課題－」第28回日本中国考古学会九州部会（福岡県福岡市、九州大学）

榎林啓介・岡元司・高津孝「寧波プロジェクト現地調査部門による東銭湖墓群の調査の現状」ワークショップ「墓・墓誌からみた宋代社会－家族・エリート・地域－」（科学研究費・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創生－」（代表 平田茂樹・岡元司ほか）（広島県東広島市、広島大学）

榎林啓介「東銭湖墓群の考古学的研究－宋墓の墓構造と親族関係－」ワークショップ「墓・墓誌からみた宋代社会－家族・エリート・地域－」（科学研究費・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創生－」（代表 平田茂樹・岡元司ほか）（広島県東広島市、広島大学）

榎林啓介「寧波東銭湖墓群調査におけるGPS利用の事例報告」平成17～21年度文部科学省特定領域研究「東アジア海域交流」現地調査研究部門2006年度集会（東京都文京区、東京大学）

榎林啓介・岡元司「南宋史氏一族東銭湖墓群現地調査報告」2006年度広島史学研究会（広島県東広島市、広島大学）

Keisuke Makibayashi, An Archaeological Examination of the Distribution of the Dongqian(東銭) Lake Graves and Their Characteristics, IAHA (International Asia History Association), Philippines

3) 論文など

藤野次史 「中・四国地方、近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社、173～206頁。

藤野次史 「後期旧石器時代前半期（初源期）の集落様相」『旧石器研究』第2号、日本旧石器学会、19～33頁。

藤野次史 「関東地方の「ナイフ形石器文化終末期」雑考」『石器文化研究』13、石器文化研究会、81～87頁。

藤野次史「旧石器時代出土石器群の剥片剥離技術」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』広島大学埋蔵文化財調査室、320～334頁。

藤野次史「旧石器時代石器群の編年的位置づけ」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』広島大学埋蔵文化財調査室、335～363頁。

藤野次史「縄文時代石器群の剥片剥離技術と石器組成」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』広島大学埋蔵文化財調査室、364～392頁。

藤野次史「西条盆地と広島大学校内の弥生土器」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』広島大学埋蔵文化財調査室、407～448頁。

Keisuke Makibayash, Archaeological Examination of the Distribution of the Dongqian(東銭) Lake Graves and Their Characteristics, 19th IAHA Conference, IAHA (International Asia History Association 国際アジア歴史学会), Philippines, 全7頁 (CD-ROM版), 2006.

Keisuke Makibayashi, An Archaeological Examination of the Distribution of the Dongqian(東銭) Lake Graves and Their Characteristics, Abstract of 19th IAHA Conference, IAHA (International Asia History Association), Philippines pp:83.

榎林啓介「中国新石器時代における甗の成立と展開－一体型甗と結合型甗－」『古代文化』第58巻3号、(財)古代学協会、85～106頁。

榎林啓介「広島大学校内の縄文時代遺跡の立地とその特徴」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』広島大学埋蔵文化財調査室、393～406頁。

Ⅱ. 埋蔵文化財調査室の組織（2006年度）

1. 埋蔵文化財調査室設置要項

（趣 旨）

第1 この要項は、広島大学埋蔵文化財調査室の設置等に関し必要な事項を定めるものとする。

（設 置）

第2 広島大学（以下「本学」という。）に、本学構内の埋蔵文化財の発掘調査等を行うため、広島大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業 務）

第3 調査室は、発掘調査等に関し次に掲げる業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) 調査資料の保管・管理および公開
- (5) その他必要な事項

（審議機関）

第4 調査結果等についての審議は、財務部に設置された施設マネジメント会議で行う。

（組 織）

第5 調査室に、次の職員を置く。

- (1) 室長
- (2) 室員

第6 室長は、副学長（財務担当）をもって充てる。

2 室員は、本学専任の助教授、講師、助教又は助手をもって充てる。

3 室員は、学長が任命する。

（事 務）

第7 調査室の事務は、関係部局の協力を得て、施設管理部において処理する。

（雑 則）

第8 この要領は、本学における埋蔵文化財の発掘調査等が終了した日に、その効力を失う。

附 則

この要項は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成17年4月1日 一部改正）

この要項は、平成17年4月1日から施行する。

2. 組織（2006～2008年度）

室 長

前川功一（財務担当副学長）	2004年4月1日～2007年3月31日
弓削孟文（医療・施設担当理事）	2007年4月1日～2008年3月31日
清水敏行（財務担当理事）	2008年4月1日～

調査室員

藤野次史（大学院文学研究科助教授）	2003年4月1日～2007年3月31日
（埋蔵文化財調査室准教授）	2007年4月1日～
槇林啓介（大学院文学研究科助手）	2005年4月1日～2007年3月31日
（施設部教務補佐員）	2007年4月1日～2008年4月30日
原田倫子（施設部教務補佐員）	2005年4月1日～2007年3月31日
永田千織（埋蔵文化財調査室教育研究補助職員）	2008年5月1日～
手島智幸（施設部技能補佐員）	2006年4月1日～2008年3月31日
岩本三津子（埋蔵文化財調査室契約技能職員）	2008年6月2日～